冷戦構造　情報通信革命　グローバル化　里山　渋沢栄一　論語と算盤　福沢諭吉　きつねうどん　神農さん　道修町　漢字文化圏　上海　長江　遣唐使　杜甫　李白　漢字革命　ジャパンアズナンバーワン　縮み志向の日本人　アジア文化圏の時代　君よ憤怒の河を渡れ　キリスト教文化圏　国交正常化　戦争　経済開放政策　清国　神社　尖閣諸島　GDP　インターネット　グローバル　コモンズ　出汁文化　孫悟空　三国志演義　金融危機　戦構造　情報通信革命

文明・文化のグローバル化や世界規模の情報通信網によって、各国の多様な文化が交錯するいま、日本を含む東アジア諸国は、互いの文化力をどう交流し、いかに相互理解と安定につなげていけるのか。第一分科会では、東アジア文化の特徴とその強みを探りつつ、東アジアの文化戦略における今後の日本の立場と役割について、さまざまな意見が出された。

東アジアとともに進む
日本の文化戦略を探る

エズラ・ヴォーゲル氏
（ハーバード大学名誉教授）

佐々木幹郎氏
（詩人）

佐藤茂雄氏
（大阪商工会議所 会頭/京阪電気鉄道代表取締役CEO）

王　敏氏
（法政大学教授）

コーディネーター
萩尾千里氏
（大阪国際会議場社長）

アジア文化の特徴と弱点

萩尾　近年、世界的に文化と文明の関係が非常に大きな問題になってきています。急速にグローバル化が進み、同時に文明の多様化も進むことから、どんどん世界が広がっていっています。それは国と国、人と人との交流を促進するというメリットもありますが、同時に、交流によってもたらされる異質なもの、それによる摩擦、あるいは価値観の違いというものも受け入れなくてはならなくなってきました。また、米ソの冷戦構造が氷解し、イデオロギー対立も沈静化しました。その上、交通および情報通信革命により、国の垣根が低くなってさまざまな文化が流入する、まさに文明の液状化現象が起こっているといえるでしょう。だからこそ、世界が大きく変わろうとしている今の時代に、文明に対する考え方をきちんと認識しなければ、混乱が起きるんじゃないかと考えます。その根底となる文化を我々はどのように理解し、どのように活かしていくのか。それを第一のテーマとして議論したいと思います。国や地域、そして関西にとって、文化力は何を意味するのか。アジアの共通文化の特色と弱点とは。そういうことを含めてご発言いただきたいと思います。

佐藤　文化の大切さはよく分かるのですが、我々はまず先に自国の文化の見直しと構築から始めるべきではないかと思います。いま日本では、地方が荒廃し、里山の文化が失われつつあります。そんな中、日本人のアイデンティティとして保ってきた文化は、どういうもので、それがどう廃れてきているのか。それをきちんと整理し直すことが問われていると思います。弊社（京阪電鉄）の創立者・渋沢栄一の起業哲学を記した著書『論語と算盤』には、開国を迎えた明治という時代に、どうやって西洋に立ち向かっていくか、今後の展開をどのように国論にまとめたかなどが書かれています。まさに現代の日本が閉塞感の中で行き場を失うなか、どうすればそれを打開できるのかといった指針が示されているようで、今の人々が本書に救いを求めているようにも思えます。そこで私は、こういった渋沢栄一や福沢諭吉などの考え方が、振興著しい東南アジアの国々でも通用するのかどうか、大変興味を持っております。もしその考えが通用するならば、日本は先に勃興した立場として、東南アジアの国々に過去の経験をご指導することができ、それをきっかけとして、価値観の共有化や異なる価値観をお互いに認め合うことができるのではと思います。

ポン酢的な役割を担う文化

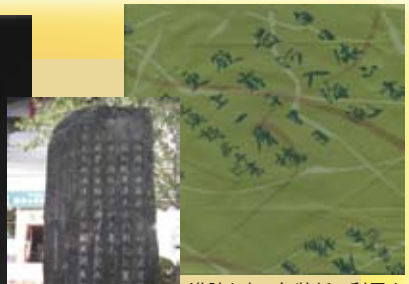
王　今の時代に文化とは何かをわかりやすく解説するならば、“日本のポン酢のような役割”だと思います。ポン酢は和食はもちろん、西洋料理や中華にも合い、どんなものともコンビになることが可能ですね。この文化というよき協力者を媒介にして、相互の理解が深まるわけです。例えば、大阪で事例を挙げますと、“食＋文化”のコンビ。大阪発祥の食べ物にきつねうどんがありますが、じつは中国や韓国の人は来日し、この料理を見ると、「日本は狐も食べるのか」と大変驚きます。それをきっかけに、日本における狐の存在を通して、日本への興味が深まるわけです。例えば、日本で狐は農業の神様であり、また日本には狐を描いた童話が数多くあるなど、狐は昔から子どもの友達です。最初にきつねうどんが刺激剤となり、日本の文化への興味や知識が深まり、そして日本への観光、留学、ビジネスへと発展するという効果が考えられます。

二つ目の事例は、“名字＋文化”。日中韓の名字に共通して“姜”がありますが、この名字は日本では神農さんという神様を表すものとして親しまれています。また、大阪道修町の少彦名神社の神農祭、東京湯島天神の神農祭と祭りも数々行われることで、これを訪れてみたいという経済効果へと繋がっていきます。これらから考えると、文化と何かをコンビにすれば、品格をもってより早く、よりソフトに経済効果などの目的に達成することができます。文化政策とは、こうした考え方で取り組むものだと思います。

縦書きから紐解く東アジア文化

佐々木　東アジアの文化を問題にした場合、一番に共通する文化は一体何なのか。私は文字を用いて詩を書く人間なので、非常に単純に考えますと、第一に漢字文化圏であることだと思います。漢字はすべて中国からもたらされました。私が初めて上海に行った時、大阪港から瀬戸内海を通り、東シナ海を通過して、長江の河口にたどり着き、上海に入りました。海と見まごうほどの長江の大きさとそこから流

王　敏氏



漢詩を店の包装紙に利用するといった日本の和魂漢才の知恵とアイデアは、今後の文化政策のヒントに。

「文化」は、食など何かとコンビにすることで、お互いの国を理解するための理解や興味が促進される。

漢字に関係する本がベストセラーになるなど、日本は東アジア漢字文化圏のリーダーでもあり、その影響が中国にも及んでいる。

れてくる土砂の多さ、その土砂によって真っ茶色に染まる海の色など、その光景は日本という小さな島国に住んでいた人間が初めて見た雄大な大陸の姿でした。このルートはかつて遣唐使たちが通過したのと同じで、遣唐使たちが見聞きし、体験したであろう思いを自分に重ね合わせながら大陸に近づいていった時に、この土砂の一粒一粒と同じように、大陸から文字も一粒ずつ運ばれてきたのだという感触を受けました。このような海路を通じて漢字は日本に届き、朝鮮半島やベトナムには陸路を通じて届いたのでしょう。そんな風に中国の漢字文化が周辺の国々に円周を描くように伝わり、その漢字がもたらした威力というのは1300年以上ずっと続いているわけです。しかし、ここ40年余りの間に漢字文化には大きな変動が起こっています。じつは漢字を作り出した中国では、表記がすべて横書きになっています。新聞も本も杜甫や李白の詩さえすべて横書きです。そして、韓国はハングル中心ですが、ここでも横書き、台湾は横書きと縦書きが半々になっています。横書きは情報が多く入り、早く読めるというメリットがありますが、同時に読み飛ばしが多くなる。けれど、縦書きは、目の周りの筋肉をしっかり動かし、文脈をきちんと押さえながらでしか読み取ることができない。だから日本では教科書や裁判所の判例など、大事な文章は今でも縦書きなのです。日本の縦書き文化とは、もともと中国が作り出した文化に、後々ひらがなやカタカナを発明したことで、縦書きを東アジアで唯一優先した文化なのです。中国や韓国などは同じ漢字文化圏でありながら、この表記の変化によって同じ文章でも意味が違うように見えてきます。かつて同じように受け止めていた杜甫や李白の詩でさえ、今では別のニュアンスで読み取る時代になってきています。つまり、異文化理解のヒントは、このような微細な問題の中に大きな理解の糸口が隠されているように思えます。

エズラ・ヴォーゲル氏

佐々木幹郎氏

漢字を各国の文化政策に

萩尾　佐々木さんから漢字文化圏の話題が出ましたが、他にご意見のある方はおられますか？

王　漢字文化圏に関していえば、大陸で失われつつある旧漢字の在り方や形態が、日本は今も活性化された状態で現在の生活の中に見ることができます。例えば、漢詩が書かれているお菓子の包装紙です。この発想とアイデアは世界のどこを探してもなく、じつに感激すべきものです。また、2009年の日本のベストセラーは、『読めそうで読めない間違いやすい漢字』で、漢字検定にいたっては、2008年には英検を越え、289万人が受験しました。そして、日本は中国に漢字を学んだだけで終わらず新たに生産し、今では逆に中国は日本製の造語漢字1000語以上を使用するなど、特に若者主導で漢字革命が起こっています。さらに驚きの調査があります。中国の小学校で学ぶ漢字を調べたところ、約82％が日本語検定試験に含まれている漢字に合致しており、つまり、お互いに言葉が話せなくても、漢字を通して交流することができるのです。世界の母語人口のデータをみると、英語よりも中国語の人口の方が多いこともあるので、漢字をきっかけに言語を越えて相互理解の文化政策を考えてみるのは面白いと思います。

ヴォーゲル　学者の目から各国の文化を見る場合、主に二つの意味を考えます。一つは社会全体の考え方であり、もう一つは音楽や詩など。我々は文化政策を考えた場合、お互いの国を理解するために、お互いがどういう関係なのか、どういうことを一番大事にすべきか、そのためにはどういう考え方があるのかを、もっと深く尊重し合って考えなくてはなりません。まずは全体を見渡し、その後、自分の生活や経験を踏まえて、根本的な考え方を互いに理解すべきだと思います。

外交が内向き傾向にある日本

王　日本が文化政策を行う上で、ぜひ参考にしていただきたい三冊の本があります。それは、エズラ・ヴォーゲル氏の『ジャパン・アズ・ナンバーワン』、李御寧氏の『縮み志向の日本人』、レオン・ヴァンデルメールシュ氏の『アジア文化圏の時代』。ここには見事な文化政策の指摘やヒント、提案が書かれています。三氏は日本への深い愛情を抱きつつ、日本に対し、自己認識と他者認識が重要であると指摘されています。それは、日本は時に内向き傾向になりがちだが、アジア発展の筆頭であるという自覚を持ってほしいということです。日本は16世紀を区切りにして、精神遍歴と体験が分断されがちになったのではないでしょうか。16世紀までの日本は、アジア共同体への自発的な模索を始めた先行者でした。しかし、16世紀から現在に至るまでの日本は欧米価値基準に転換したことで、再度アジアに目を向けようとしても、

欧米価値基準に並ぶもう一本の基軸をうまく立てにくい状態になっていると思います。

萩尾　本日は会場に女優の中野良子さんがお見えです。中野さんは文化大革命後、中国で初めて上映された外国映画として大ヒットした『君よ憤怒の河を渉れ』に出演されたことで、中国でも国民的人気のある女優さんです。中国や世界の国々と日本との交流についてのお話しをしていただければと思います。

目に見えない文化力のパワー

中野　私はこの映画を機に、長年にわたり、中国をはじめ世界の国々と国際交流活動を行ってきました。最近驚いたのは、ある中国関係者との覚え書きの中に、「たとえ不可抗力な事態（自然災害や政府行為など）が発生し、事業の継続が困難になりそうな場合でも、真摯な協議を行い協力し合う」という文言があったことです。今まで32年間交流していますが、こういった文言はあまりありませんでした。中国もたくさん国際交流を行うことで、政府は政府、民間は民間そして必要な時は国も民間も協力し合うといった考え方が生まれているんですね。私が考えるに、文化力とは何か？といえば、生命力であり、生きている証そのものだと思います。相異が多く、また複雑な日中間を行き来していると、中国という国に対して、どう対応してよいか分からず戸惑いを感じたり、また想像を超えた素晴らしい出来事に遭遇するなど言葉に表せないほどカルチャーショックの連続でした。今でもそれは続いています。そんな中、気持ちを癒してくれるのも同じ中国で生まれた歌という文化でした。文化力は技術力と比べると、その影響力を数値で測ることはできません。しかし、目に見えねども文化力は国と国、人と人とを繋ぐパワーがあると私は実感します。

中野良子氏

中国は今後どう変化するのか

萩尾　アジアは近年、成長センターとして世界から注目を浴びていますが、この地域はキリスト教文化圏に比べ、文化の多様性から相互理解が非常にしにくいと思います。そして、日本にとってのアジアといえば、ずばり中国と韓国といえるでしょう。ここ数年を見ていると、韓国とは非常にいい感じになってきており、違和感がないぐらいに理解が深まってきています。しかし、それに反比例にして、中国との関係がだんだん悪くなっており、日本も韓国も今後の中国の動向に恐怖感を持っているのは間違いありません。そこで第二のテーマとして、中国は今後どういう風にソフトランディングしていくのか？まずは王さんに口火を切っていただきたいと思います。

王　近年、中国の政治や経済、そして文化が変わりました。その中で、何より民衆の力がついたという、今までなかった方向に展開していることをまずは注目していただきたいと思います。つまり、中国人一人一人が教育を受ける機会が増え、グローバル化の風が吹いたことでより加速し、さらに情報革命の産物でもあるパソコンの普及によって、一人一人の内面で変化が起こったということです。今まで日中間の相互理解は、政府を窓口にし、政府の主要な代弁者に頼っていましたが、今では民衆間の対話、民衆間の相互認識が重要になっています。しかし、民衆間の相互認識として、中国と日本は互いの情報が入ってこない三つのブランク期間があったことを認識していただきたい。一つめは1931～1945年の戦争時期、二つ目が冷戦時代、三つ目が国交正常化以降です。このような期間を経て、1978年の経済開放政策後に一般国民にも情報が開放されたのですが、その時初めて出会った中国人と日本人は、今まで襖を介して挨拶していたような関係から、一気にその襖が吹き飛び、そして隣の国を見てみたら、驚くほど生活レベルが違っていた。なんと、中国人と日本人の生活は各方面から見て、約30年の格差があったのです。一人一人の人間にとって生活が違えば、価値基準の考え方や思考も変化が起こります。つまり同一性よりも異質性の方が大きかったのです。

日本と中国の相互認識の違い

王　また、日本と中国の相互認識のパターンが４つあることが分かりました。一つめは「古代と古典へのこだわり」。日本にとって初めて出会った中国人は古典の国の中の人というイメージでした。また、中国人にとっての日本は、近代化以降の平和建設に貢献してきたイメージは少なく、むしろ中国から学んだ国というイメージがあり、お互いに認識の差があったと思います。二つめが体験型による「戦争による記憶」。三つめが政治型による「冷戦構築による概念」。両国が同時に経験した冷戦時代は敵対関係でしたので、その関係に基づく思考が今も続いていたり、もしくは瞬間的にそう考え

てしまう思考パターンが今もあると考えられます。四つめは利害型による「経済関係による選択」。経済交流による拝金主義の影響から、すべて金銭で選択するという考え方です。交流が分断されていた時期があったために、この４つのパターンで互いを認識するのも仕方ありませんでしたが、2000年以降から大きく変化してきていると思います。

萩尾　それはどう変化してきたのですか。

王　不特定多数の人が日中関係に関

わり、ストレートに交流することで、まず生活がボーダーレス化しました。そうすると、先にあった４つの相互認識パターンが多様化し、「寿司は好きだが、靖国神社参拝は嫌い」「餃子は好きだが、中国の尖閣諸島問題はむかつく」など、一人一人の相互認識が分化され変化してきました。特にその傾向は若い世代に顕著ですね。そういったことを踏まえて日本に認識してほしいのは、中国では2000年から異文化理解、異文化交流を大学教育の必修科目に取り入れるなど、積極的に異文化を理解させる教育を行っています。日本はアジアの国をGDPではかる傾向がありますが、それは一つの尺度にすぎません。経済力に文化力を合わせてその国をはかり、そして付き合う。それが今後はますます必要になってくると思います。

アジアとの付き合い方

萩尾　王さんからは、とても建設的なご意見をいただきました。インターネットもなかった時代に比べれば、今は本当に大きく変化してきています。だから、いつまでも政府代表だけに任せるのではなく、時代の変化に合わせ、積極的に文化の相互理解を行うことが大切なんだと思います。そして今、日本は非常に中国を意識しています。なぜ意識しているかといえば、中国と付き合うことは今後の発展も鑑みてもメリットが大きい代わりに、何か問題が起これば軍事力を行使するのではないかという懸念もあるからです。それを踏まえ、これから中国とどのようにすればうまく付き合えるかご提案はありますか。

佐藤　中国問題で一番懸念されることは、グローバル・コモンズのリスクが増していることです。これは今までなかったことなので、それをどう解決するかは中国以外の国々と一体になって考える努力をすべきだと思います。政府間の問題になると難しくなりますので、まずは民の力で模索するべきだと思いますが、先に話に出た漢字がキーワードになるかといえば、僕はならないとみています。漢字で友好を促進するのは不可能だと思いますね。それ以外で考えるとすれば、料理や食はどうでしょう。味わいについての感覚は共通ですし、例えば、大阪のダシ文化と中国の麺文化を一緒になって

佐藤茂雄氏

作ってみるのはどうか。また、映画製作を日中友好の架け橋にするなど、民の力で中国と親しく付き合える関係を構築するのはぜひとも行っていきたいと思います。

萩尾　王さんはこの意見に何か反論は?

王　漢字を切り口に交流することに懸念を感じられるのはよく分かりますが、じつは日本人は漢字を使うだけでなく、漢字を記号として日常生活に取り入れているんですね。例えば、日本のレストランには“孫悟空”があり、高校のクラブ活動では三国志演義を上演している。これは世界のどこにも見られず、日本でのみ見られる現象なのです。この和魂漢才ともいえる漢字の取り入れ方は日本人が西洋化を成功したベースにもなっており、今でも意識の深層にあると思います。私は漢字を共有した生活や信仰、習慣、意識の普遍性を、日本発信によって東アジアでもう一度再認識する必要があるのではないかと思っております。

萩尾　漢字を媒介としてお互いの文化を研究することで、互いの文化の相違がよく見えてくると思います。そういう意味では漢字文化を漢字文化圏で研究するのは面白いですね。

アイデンティティの確立を優先

王　韓国でも2002年に小学校教育で漢字の勉強をするよう呼びかけています。それは中国と仲良くするため、または中国の古典が有用であるという判断からだと思います。日本は中国の漢字が有用であれば、それを取り入れ、英語が有用であれば、また同じように取り入れてきました。それは大事なことですが、根本には日本人としてのアイデンティティがしっかりとあることが大切なんです。それを記号にして最初に表現でき、打ち出せるのはじつは漢字なんです。それは、日本の歴史や文化を伝承させ、日本語を継続させるため、その付加価値として、今、東アジアと仲良く交流するための記号にもなると思います。

ヴォーゲル　中国と日本の関係を述べれば、ここ100年ぐらいは技術も経済も日本が勝っていると思いますね。

しかし、中国は古く大きい国なので、本来は日本よりも上にいるはずだというプライドもあり、また、戦争問題など国家間の問題もあることで、それに固執して議論を繰り返しても何も解決しません。しかし、現代は金融危機や地震、テロなど、共通の問題も増えてきていることもあり、問題に応じて協力し合うのは非常に大切なことだと思います。

本当の国際交流とは

佐々木　先ほどの話で出ました、国力をはかるのはGDPではなく多様性だという話はもっともだと思います。その多様性をどこで判断するかといえば、結局は一人一人の人間にかかっています。王さんもヴォーゲルさんもいわれるように、中国においても韓国においても民と民との対話、つまり本当の国際交流とは、古今東西、一対一の人間関係だと思います。政治が変わっても、個人個人の人間関係がきちんと築かれていれば、その信頼度によって多面的な交流が生まれ、どんなにメディアが反日感情を煽ったとしても、自分が信頼するあの人はきっと違う感情を持ってくれていると考えることができるでしょう。そういう環境を一個人が作ろうと思えば可能であると思う。僕はそれが本当の国際交流だと思います。

日本の立場と役割を再認識

王　日本は漢字を媒介にした国の中で、世界で唯一成功した国だと思います。漢字を発明した中国でも成功できなかった部分で、日本は進化し、成功しました。このことに対して自覚をしていただきたい。日本がこのことを自覚すれば、世界文化の再生を担うことができます。日本は文化力があり、経済力もあります。ですから、これからのアジアの平和と日本自身のさらなる発展のために、もう一度その役割を考えてほしいと思います。日本がさらなる発展を目指して、東アジアの国家間の対策拠点となって先行者であってほしいですね。

もず唱平氏

知的財産権で成り立つ文化

萩尾　本日は会場に、中国との音楽交流を積極的に行っておられる作詞家のもず唱平さんがお越しです。突然ですが、もずさんに、そうした活動を通した思いなどをお伺いしたいと思います。

もず　歌謡曲などの大衆音楽の世界は、経済活動つまり知的財産権を無視しては考えられません。この点において中国は、失礼ながら音楽著作権を含め知的財産権についての考え方が非常に遅れていると思います。日本音楽著作権協会（JASRAC）と中国音楽著作権協会（MCSC）が共通に乗り入れる時代になったとき、この知的財産権を真剣に考えないと、アジア文化圏から欧米文化圏へと、著作権料を一方的に支払うばかりになってしまうでしょう。今回のパネリストの方々には、大衆文化はいつも知的財産権によって成立しているということを何かの機会にご教示いただければありがたく思います。

萩尾　文化交流は民間からであるというご意見には、まさに同感します。ぜひそれをさまざまな形で実践していくべきだと思います。本日は多くのご意見をいただき、誠にありがとうございました。

萩尾千里氏

エズラ・ヴォーゲル（ハーバード大学名誉教授）
※プロフィールはp6に掲載

佐々木幹郎（ささき みきろう／詩人）
1947年、奈良県で生まれ大阪で育つ。2002～07年東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師。1970年、第1詩集『死者の鞭』を刊行後、詩集に現代詩文庫『佐々木幹郎詩集』、『蜂蜜採り』（高見順賞）、エッセイ・評論集に『中原中也』（サントリー学芸賞）、『アジア海道紀行―海は都市である』（読売文芸賞・随筆紀行賞）など多数。チベット・ネパール・中国などアジアの都市の比較文化論、テレビ出演など多数。中原中也賞、サントリー地域文化賞選考委員。

佐藤茂雄（さとう しげたか／大阪商工会議所　会頭／京阪電気鉄道代表取締役CEO）
1941年生まれ。1965年に京都大学法学部卒業。1995年京阪電気鉄道取締役、1999年同社常務取締役、2001年同社代表取締役社長、2007年同社代表取締役CEO取締役会議長に就任。現在、大阪商工会議所会頭を務める。

王　敏（ワン・ミン／法政大学教授）
1954年中国河北省承徳市生まれ。法政大学国際日本学研究所教授。大連外国語大学日本語学部卒業、四川外国語学院大学院修了。文化大革命後、大学教員から選出の国費留学生として宮城教育大学で学ぶ。専攻はアジアの文化関係、日中比較研究、日本研究、宮沢賢治研究。主な著書に、『日本と中国　相互誤解の構造』（中公新書）、『日中比較・生活文化考』（原人舎）、『中国人の愛国心―日本人とは違う5つの思考回路』（PHP新書）『謝々！ 宮沢賢治』（朝日新書）など。

萩尾千里（はぎお せんり／大阪国際会議場社長）
1937年熊本県生まれ。1960年関西大学商学部卒業、同年日刊工業新聞社入社。1969年朝日新聞社入社。1977年同社編集委員として経済を担当。1987年関西経済同友会常任幹事・事務局長、2006年大阪国際会議場取締役社長に就任。その他にも、復旦大学（上海）客員教授、大阪大学非常勤講師、関西サイエンスフォーラム専務理事などを務める。